

## 仲程昌徳著『「ひめゆり」たちの声 『手記』と「日記」を読み解く』

今 林 直 樹

本書仲程昌徳著『「ひめゆり」たちの声 『手記』と「日記」を読み解く』（以下、『声』）は、その副題にあるとおり、仲宗根政善の著した『手記』と彼の遺した「日記」を読み解くことを主たる目的としている。『手記』は『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』のことであり、「日記」は「ひめゆりの塔の記」のことである。ともに「ひめゆり」という語がタイトルに使われているが、この「ひめゆり」とは凄惨を極めた先の沖縄戦で、沖縄県女子師範学校と沖縄県立第一高等女学校の女生徒たちで編成された「ひめゆり学徒隊」のことである。仲宗根はその引率教員として沖縄戦を通じて「ひめゆり」たちと行動をとりにした。仲程氏は『声』の「あとがき」で、琉球大学に在職中、ゼミで学生、時に教員を交えて何度も読み、その度にやらなければと思いつづけてきたと記している。文学者であった仲程氏がいう「やらなければ」というのは『手記』を「読み解く」作業のことであるが、同時にそれは、仲程氏が『手記』の言葉の一つ一つを読んでいくには、さらに多くのことを「感じ」「聞きとって」いく必要があると記しているとおおり、『手記』の背景にある時代状況、あるいは『手記』に通奏低音のように流れている文字以外の要素を「感じ」「聞きとって」いく作業であった。そうした作業を通じて仲程氏が「聞きとった」ものこそ「ひめゆりたちの声」であった。

本稿は仲程氏によって著された『声』を紹介することを主たる目的とするが、そのためにはまず『声』が読み解こうとしている『手記』と「日記」の著者である仲宗根政善について触れなければならない<sup>(1)</sup>。

仲宗根政善は、1907年、沖縄県国頭郡今帰仁村与那嶺に生まれた。2007年は仲宗根の生誕百年にあたる年で、これを記念して同年12月8日、かつて仲宗根が教鞭をとった琉球大学の付属図書館多目的ホールにおいて「仲宗根政善先生生誕百年記念シンポジウム」が開催された。シンポジウムは、当時、沖縄大学教授であった比嘉政夫による開会の挨拶で幕を開け、仲宗根と深い縁のあった琉球大学琉球方言研究クラブ、おもろ研究会、そしてひめゆり平和祈念資料館からそれぞれ報告とコメント、そしてフロアからの質疑応答が行われた。

琉球大学琉球方言研究クラブは、仲宗根が琉球大学で講じた「国語学概論」が創部のきっかけとなっている。1952年、沖縄群島政府の廃止にともなって琉球大学に赴任した仲宗根は「国語学概論」で「方言が学問になる」ことを教えた。仲宗根の講義に刺激を受けた学生たちの間で方言研究に対する関心が高まり、1957年、仲宗根を初代顧問として同クラブが創設されたの

である。同クラブからは数多くの琉球方言研究者が輩出している。

おもろ研究会は1968年に始まった。翌年、東京大学での長期研修から帰任した仲宗根が自宅を研究会の場として提供して以降、1989年に場所が現在の沖縄県立芸術大学に移るまでの20年以上の長きにわたって、仲宗根宅で開催された。仲宗根がこの世を去った1995年に同研究会は1000回を迎え、同年9月23・24日にはその記念の研究発表大会を仲宗根の故郷である今帰仁村にある今帰仁村コミュニティ・センターで開催している。

ひめゆり平和祈念資料館は1989年に開館した。仲宗根はその初代館長である。先述のとおり、仲宗根は沖縄戦において「ひめゆり学徒隊」を引率し、南風原の陸軍病院や摩文仁の第一外科壕などを転戦したが、沖縄島最南端の喜屋武岬で米軍に追い詰められる中、手榴弾を抜こうとする生徒たちに対して生きることの大切さを説き、生徒12名とともに米軍の捕虜となる道を選んだ。沖縄戦でひめゆり学徒隊と共にした一連の行動の記録が『手記』である。仲宗根は『手記』を通して沖縄戦とひめゆりたちの悲劇、戦争の悲惨さと平和の尊さを訴え続けた。『手記』（角川書店版）の「まえがき」に仲宗根は次のように記している。

昔から平和であった沖縄のこの美しい空を、この青い海の上を、戦闘機の一機も飛ばせたくない。戦争につながる一切のものを拒否する。

二十余万の生霊の血のしみたるこの島を、平和を築く原点としたい。

一方で『手記』は、同じく「まえがき」に記されたように、仲宗根にとって「懺悔録」であった。仲宗根は転戦の過程で教え子たちの死に立ち会い、重傷を負って動けない生徒を壕に残したまま心ならずも壕を後にするという経験をした。仲宗根の自筆の歌集である『蚊帳のホタル』には「わが命 つづく限りは 血のしみし あとをたづねて とぶらい行かむ」<sup>(2)</sup>という歌が収められているとおり、仲宗根は戦後の後半生を懺悔して歩むことになるのである。

『声』は仲宗根の『手記』と「日記」を取り上げているが、そのほとんどの部分を『手記』が占めており、本稿でも主として『手記』に関する部分を紹介していきたい。

『声』では、まず第1章の「序」において『手記』の出版動機や特徴などを整理している。それによると、『手記』は最初の出版から4度版を改めて出版されている。すなわち、最初は、1951年に華頂書房から『沖縄の悲劇一姫百合の塔をめぐる人々の手記一』として、次に1968年に文研出版から題名を変えて『実録 ああひめゆりの塔』として、その次は1974年に東邦書房から『沖縄の悲劇一ひめゆりの塔をめぐる人々の手記一』として、そして最後は1980年に角川書店から『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』として刊行されている。

こうして出版社と題名を変えつつ版を重ねた『手記』は、版を改めるたびに増補改訂されていく。仲程氏によれば、それは「まえがき」「生徒手記」「あとがき」「戦没者氏名」「遺影の増

補」の5点である。先に引用した『手記』「まえがき」の一部は角川書店版で新たに増補された箇所である。ではなぜ、仲宗根はこうした増補を行っていったのであろうか。仲程氏はそれを「いよいよ強くなっていく、基地への違和」であるとしている。

戦後、沖縄は27年に及ぶ米軍統治の時代を経験した。米ソ冷戦時代の幕開けとその展開、そして朝鮮戦争など沖縄を取り巻く緊迫した東アジアの国際情勢を背景に、米軍は1950年以降、沖縄に本格的に基地建設を行った。沖縄ではこうした米軍統治を「異民族統治」とみなしそれからの脱却を求めて日本復帰運動が巻き起こった。復帰自体は1972年5月15日に実現したが、沖縄から基地はなくならなかった。それどころか、むしろ復帰後も増え続けた。復帰の日、仲宗根は「日の丸の 旗もあがらず 爆音の とどろきわたる 復帰のあさけ」<sup>③</sup>という歌を詠んでいる。言うまでもなく「爆音」とは米軍基地発着の米軍機から発せられたものである。こうした状況に対して、ひめゆり学徒隊の引率教員であり、多くの教え子を戦場で失った仲宗根は強い憤りを持ったのである。

仲程氏によると、そもそも仲宗根が『手記』の刊行を思い立ったのは戦争につながる一切のものを拒否するという強い思いに発していた。そのためには戦争の実態をまず伝えることが必要だと痛感し、ひめゆり学徒隊の生存者に手記の作成を呼びかけていくのである。手記を作成した生徒の数は華頂版で14名であったが、文研版で3名の手記が加わり、東邦版でさらに2名の手記が加わった。項目の数も版を重ねるたびに増えていき「艦砲射撃はじまる」から「浄魂を抱いて」まで38を数えるまでになった。

しかし、その一方で、手記作成の呼びかけを受けた生徒の中には、書こうとしても手が震え、頭が割れるように痛んで書くことのできない生徒もいた。仲宗根はそうした生徒たちにも書き残してくれるように根気強く説得を続けた。仲宗根は『手記』「まえがき」に次のように記している。

戦場に印した乙女らの血の足跡をありのままに記すことは、亡き乙女らへの供養にもなるうかと、灯油もなかった終戦直後、ビンにはいったマラリヤ蚊の防止薬をともして書きためた。私は乙女らの胸に飾られた赤十字のマークが永遠に輝くことを信じている。世界の人々が国境を越えて、この乙女らに花を手向ける日が来ることを信じている。

こうした仲宗根の思いが、沖縄で増え続ける基地への強い怒りを伴って、「戦争につながる一切のものを拒否する」という激しい表現になって示されていくのである。『手記』とはこのような背景を持って刊行された書であった。

さて、ここで『声』の持つ特徴について整理しておきたい。

第1に、沖縄戦および沖縄戦におけるひめゆり学徒隊の行動を理解するために必要な用語あ

るいは基本的な事実に関する丹念な確認作業がなされていることである。例えば、仲程氏は『壕』を抜きにしては、沖縄の戦いも生徒たちの沖縄戦も語れない」と記し、沖縄戦の理解に不可欠な要素として「壕」を取り上げて「壕」が果たした役割について詳述している。仲程氏は「壕」をキーワードに『手記』からは「壕」が多く避難民の命を救ったことは間違いないとしながらも、同時に、心を痛めるような出来事が数多く起こった事実を読み取る。後者については壕から撤退を余儀なくされたときに壕に置き去りにされた重傷患者がいたこと、日本軍兵士による民間人の追い出しがあったこと、米軍からはいわゆる「馬乗り攻撃」を受けたことなどがあげられる。仲程氏はこうしたことを「壕」はよく物語るものとなっていくと記している。

いま一つの例をあげると、仲程氏は『鉄道路線』は、『ひめゆり学園』について語る際、落とせないものの一つであった。」と記している。ここで「ひめゆり学園」とは沖縄県女子師範学校と沖縄県立第一高等女学校を指しており、「鉄道路線」とは当時沖縄にあった「軽便鉄道」のことを指す。こうした、今となっては存在しない施設あるいは設備などについて、例えば、ひめゆり学園については本文に加えて「コラム」で紹介し、「軽便鉄道」についてはそれをタイトルとする項目を立てて紹介している。中でも「軽便鉄道」については徳田安周の作詞による「軽便鉄道節」を紹介して、当時の沖縄の風景を詩情的に描き出しているが、同時に、1944年12月11日に部隊の移動に伴って起きた事故で多くの女生徒の命が失われたこと、そしてその事故が戦争への不安をますます大きくしていったことを記している。これらに加えて、1944年10月10日に那覇に行われた「十・十空襲」やひめゆり学徒隊の女生徒たちが看護婦として勤務することになる陸軍病院など、沖縄戦やひめゆり学徒隊にとって欠くことのできない歴史的事実や事物について詳細に記されていて、読者にとっては『手記』をよりよく理解する手助けとなっている。

第2に、仲程氏が文学者としての視点で『手記』を読み解いていることである。例えば、該当する項目のタイトルをあげてみると、「括弧の注記」「風景 修辞法」「人称表現」「用語 月・月影→水・雨→アダン」などである。

「風景 修辞法」では仲宗根が直喩法を『手記』のいたるところで駆使していることや、擬人法やオノマトペの使用がみられることなどに注目している。仲程氏は、直喩法の使用については、仲宗根が「異常な状態を、なんとか言い残そうとしたことによるものであり、状況をより鮮明に伝えようとしたことのあらわれであった」と解釈している。また、オノマトペについても、それが「現場を生々しく再現する。現場的であるゆえに、戦争という異常な状況を活写する上で欠かせないものとなる。」と記している。仲宗根は沖縄戦を通じて文字通り「異常な状況」に身を置いた。それは筆舌に尽くし難いものであったが、しかし、同時にそれはなんとしても記録として残さなければならないと仲宗根が強く思っていたものであった。そうした中で仲宗

根は修辞法を駆使していったのである。仲程氏はそうして出来上がった『手記』の修辞法に、風景の変化で照らし出された沖縄戦の推移や、その風景がよく反映してもいたところの動きを読み取るのである。

「用語 月・月影→水・雨→アダン」では、『手記』の文章中に頻繁に見られる用語が変化していていることを、実例を挙げながら詳述している。例えば、仲程氏は角川書店版になって全体で38の項目を「陸軍病院の日々」(1～13:項目番号、以下同様)、「戦火に追われて」(14～26)、「死の解散命令」(27～36)、そして「浄魂を抱いて」(37～38)の4部分に分けていることを指摘し、各部の文章中に頻繁に登場する語がはっきりと変化していることを、具体例を挙げながら指摘している。例えば、「陸軍病院の日々」では「月」や「月影」を移した文章が頻繁に見られていたが、「戦火に追われて」になると「水」や「雨」の描写が次から次へと続いていき、「死の解散命令」になるとそれは「アダン」の語で満たされる。まさに『手記』の3つの部分は「月・月影」、「水・雨」、「アダン」という語によっても区分できるほどに、そうした言葉が集中して現れていたのである。仲程氏は、こうした文章中に見られる使用する言葉の推移を、壕内活動から撤退、逃避というように仲宗根とひめゆり学徒隊の女生徒たちを取り巻く状況が、ある言葉を頻出させる見事な用例であると述べている。

第3に、仲宗根自身そして仲宗根の家族について注目していることである。例えば、先に仲宗根は琉球方言研究者であると記したが、「方言手帳」と題する項目では転戦の中で仲宗根が自ら調査してまとめ、大切にしていた方言手帳を手放さなくてはならなくなったという良く知られたエピソードが取り上げられる。仲程氏も記しているように、「方言手帳」は「沖縄学の父」として仲宗根も敬愛した伊波普猷の指示を仰ぎながら心血をそそいで書きためたものであった。仲宗根はそれを戦後も長く忘れることができずにいた。仲程氏はそうした仲宗根の思いと人命だけでなく人が心血をそそいだものまですべてをずたずたにしてしまう戦争の悲惨さを、沖縄戦に参加した米軍の海軍士官の文章を引用して書いている。まさに「二度と戦争なんか真っ平だ」と、勝者の側にあったものでさえそう思うほどに、沖縄戦(そしてそれを含むすべての戦争)は惨憺たる傷跡を残していくのである。

「妻子」については、仲程氏は仲宗根の妻子に関する記述を「見落とせないものの一つ」として注目している。言うまでもなく、戦争は家族を離ればなれにするものであり、そうであるがゆえに別れた家族のことが頭に浮かび、その安否をずっと気にかけていくことになる。仲宗根は自分の妻子だけでなく行動を共にしている人々の中にある家族を思う気持ちをも描写している。仲程氏はそうした家族に関する記述について、仲宗根が、戦争がもたらす家族の離散という悲惨な現実を訴えたかっただけではなく、家族を恋い焦がれながら亡くなっていったものたちに代わって、彼らの思いを伝えたかっただけではないかと解釈している。

第4に、『手記』の中のひめゆり学徒たちの生活に関する記述からキーワードを拾い出し、確

認作業を行っていることである。その中の一つに「歌」という項目がある。これこそが本書のタイトルになっている「ひめゆり」たちの「声」に関する項目である。仲程氏は『手記』の記述の中から歌に関する個所を取り上げ、校歌や軍歌が歌われたこと、歌は壕内の退屈に耐えかねて歌われたこと、あるいは壕内の換気のために歌われたことなどを紹介している。歌った歌について、原則として禁止されていた流行歌をひそかに歌うということもあったが、歌といえば軍歌が中心だったことは、時代環境を考えれば間違いないことであるが、しかしそれでも歌は女生徒たちにとって生きていることを実感させるものであったはずである。しかし、やがて生徒たちから歌が消えていく。仲程氏は「歌の好きな生徒たちから歌声が消えたのは、日常生活が消えていたことを示す以外のなものでもないはずである」と記している。すなわち、沖縄戦が最終局面を迎える頃には、生徒たちから日常生活が奪われ、歌が奪われていったのである。そしてそれは生きる希望を奪われることでもあったことは言うまでもないことであろう。

その他、本書では沖縄の人々や朝鮮人、あるいは日本軍兵士や米軍兵士に対しても目を配っている。これらを含めて、『手記』に関する様々な点について、そのすべてを記すことはできないが、本書を通じて、我われは『手記』に描かれた沖縄戦やひめゆり部隊に関する理解をより一層豊かにすることができる、あるいはより深く理解することができるといえよう。本書は『手記』あるいは『ひめゆりと生きて 仲宗根政善日記』（琉球新報社、2002年）と題して刊行された「日記」を読むときにはぜひそばにおいておきたい一書である。

仲宗根は1995年に亡くなった。その3年後、仲宗根の追悼文集（『追悼・仲宗根政善、1998年、沖縄言語研究センター』）が出されたが、そこに寄せた仲程氏の追悼文を最後に紹介して本稿を締めくくりたい。

仲程氏は上記文集に「歌の終わりー『蚊帳のホタル』を読むー」<sup>(4)</sup>という追悼文を寄せた。『蚊帳のホタル』とは仲宗根の自筆による歌集である。仲程氏は冒頭に仲宗根の「よきことの今年もあらむ教へ子の夜のふくるまで集ひさわぐも」という歌を紹介している。それは1985年1月1日に詠んだ歌で、それまで毎年、変わることなく、夜更けまで続いた新年会を歌った一首である。仲程氏によれば、仲宗根が自詠の歌を収録して『沖縄の悲劇ー姫百合の塔をめぐる人々の手記』を刊行したのは1951年で、仲宗根が再び歌を詠みはじめるのが1963年頃。その間の10年以上歌作が途絶えていたのだが、再開された歌作は1970年に入って急速に多くなったという。仲宗根の歌は戦時を回想したものが多くなり、それは歌の終わりまで変わらなかったというが、仲程氏は仲宗根の「黒髪の地下にうづもれ朽ちはてむみ眼のかがやき空のごとくに」を引用して、仲宗根は「眼のかがやき」と「屍」を常に背にしていた、そしてそれは「眼のかがやき」が一際鮮やかに思い浮かぶと、すぐに「屍」も鮮やかになるという実につらいものであったと述べている。その仲宗根の歌作に終わりがきたのが1985年のことである。仲程氏は先に記したその年の新年の集いを歌ったその歌を「特別に感じられる」と記しているが、その理由は「教

へ子」という言葉にまつわる姿にあると述べている。ここは、少し長くなるが、仲程氏の文章をそのまま記しておきたい。

ここに歌われている笑いさんざめく「教へ子」たち。夜更けまで騒ぎたてる彼や彼女たちに、先生は丁度40年前の「教へ子」たちを重ねていたとは思えないが、先生にはその「教へ子」たちが心の奥深くに住みついていた。

二十人にただ四人生く、百九十四人の教へ子帰らず  
 教へ子を壕に残して出づる夜の闇をつんざき砲声うなる  
 いやはての巖に追はれて粥炊きて我に与えし教へ子のあり  
 いたづける我をかばひし教へ子とふけゆく夜の蛙を聞けり

「教へ子」という万感胸に迫る言葉。

「壕」と「闇」の中に浮かぶ「教へ子」たちと「集ひさわぐ」「教へ子」たち。歌の最後に来て、先生は黙した「教へ子」たちではなく、「集ひさわぐ」「教へ子」たちを歌にした。それを、やっと先生の心が解き放たれたのだとするのは、騒がしかった子らの、そうであって欲しかったと思う切ない希望が生んだ読みなのであろうか。

仲宗根は『手記』を沖縄戦の悲惨さとひめゆり学徒隊の女生徒たちの悲劇を二度と繰り返してはならないという強い思いを持って刊行した。教え子を戦場に送り、戦争で死なせるというつらい経験を持ったからこそ、二度とそういうことが繰り返されないようにと仲宗根は強く願ったのであった。しかし、1972年5月15日の沖縄の日本復帰から40年が経過して、その間、仲宗根が『手記』『まえがき』に記したような沖縄の上空に戦闘機が飛ばない日は1日とてなかった。「戦争につながる一切のものを拒否する」という言葉も、2012年に新たに沖縄に配備されたオスプレイの前には空虚なものとなってしまった。こうした状況にある今だからこそ、仲宗根の『手記』、そして「日記」を読み、仲宗根とひめゆり学徒隊の女生徒たちの声に耳を傾けなければならない。繰り返しになるが、その声に真摯に耳を傾けた仲程氏の著した本書は『手記』と「日記」のそばに常において読まれるべき書物である。

#### 註

- (1) 仲宗根政善について、筆者は、主として琉球方言研究あるいは琉球方言研究クラブとの関係から論じたことがある。それについては、以下の文献を参照。拙稿、「仲宗根政善と琉球大学琉球方言研究クラブ—戦後琉球方言研究の黎明—」(『沖縄研究ノート』16、2007年、1-14頁)、拙稿、「戦後沖縄における琉球方言研究—仲宗根政善と琉球大学琉球方言研究クラブ—」(『多言語社会研究会年報』第4号、2007年、120-132頁)、拙稿、「仲宗根政善生誕百年を迎えて」(『沖縄研究ノート』17、2008

- 年、1－10頁）。
- (2) 仲宗根政善、『蚊帳のホテル』、沖縄タイムス社、1988年、56頁。
  - (3) 同前、60頁。
  - (4) 仲程昌徳、「歌の終わり―『蚊帳のホテルを読む―』（『追悼・仲宗根政善』、沖縄言語研究センター、1998年、100－103頁、所収）。